

幼稚園児保育園児の為の 「日本舞踊教育」を考える

丸 山 泉

現在日本舞踊は、一部の人だけに愛好されています。だから、とても日本文化の代表選手とは言えません。従って、多くの人々の目に触れる機会はないというのが実状です。

その理由として、ほとんど全面的に西洋化された教育と、幼児の頃から日本文化を正しく評価できるようにする為の教育がなされず、日本文化の教材も少なく、当然学習体験もゼロに等しいことなどがあげられます。

そこで、私は日本舞踊を幼稚園児並びに保育園児の授業、つまり四、五歳児を対象とした教育の一環として、考え直してみようと思います。そして日本舞踊が集中力を養うのにいかに適しているか、と同時に、いかに表現力に富んでいるかということも考察しようと思います。

最初に、現在の「幼児教育」と「日舞」との関係についてです。

特に、スポーツ関係に力をいれている幼稚園が多く、スイミング教室、サッカー、体操教室などの授業が受けられるか、あるいは、その内のどれかが選択できる幼稚園が人気を呼んでいます。他に、絵画やピアノなどを習っている四、五歳児も多く、何も稽古事をしていない幼児はほとんどいません。

日本文化の誇りとも言える「日舞」に対する意識度がかなり低いのは、日本舞踊は日本文化の代表のひとつであるということをお忘れしてしまったからなのではないでしょうか。それとも、日本文化を子供の頃から習得させるという教育そのものがお忘れしてしまったからなのではないでしょうか。

欧州、アジアの諸外国では、自国の舞踊や楽器演奏の教育を非常に熱心にやっていると聞きます。

日本では、戦後西洋化された教育に統一され、日本文化を大切にされた教育は忘れられてしまいました。現在の詰め込み教育には、日本の文化をかえりみる余裕はもうなくなってしまったのでしょうか。家庭内暴力も非行も余裕のなくなった教育が原因とする社会現象のような気がするの私だけでしょうか。

それなら、なおさら幼児の頃に日舞を踊らせてやりたいと願わずにはいられません。そういう願いを込めて、従来の日舞とは異なった方法で（この方法については後に詳しく述べます。）五、六人の四歳児に教えたところ驚ろくべき結果ができました。まず、その内で特殊であり、且つ、最も顕著な結果を得た二つの例を紹介します。

最初の例は、自閉症傾向のある四歳児です。この子供に日舞を教えたところ、踊りが上手になり、日舞が好きでたまらないと言うようになりました。

それまで、幼稚園では、お遊戯はもちろん歌を歌う事もなく、友達と遊ぶことも全然ありませんでした。ところが、日舞を覚えてからすっかり変わりました。友達と遊ぶようになり、幼稚園へ行くことも拒否しなくなりました。日舞は結果的に自信を与え、精神安定剤の役割を果たしました。

この子の場合、スポーツが嫌い。けれども、和服が好きで、雛壇の上で座っていたいくらいにお雛様に憧れていましたから、日舞を踊ることにより子供の心は潤っていったのです。案外和服が好きな幼児が多いのも事実です。着物の美しさと、ゆっくりした間のとり方もこの子供に感動を与え、心を満たしました。昌子武司氏は、「自閉症と情緒」という本の中で、「自閉児の中には、音に対して敏感な子供が少なくない。これを利用した指導法が、もっと開発されるべきだと思う。生活に密着した音楽、日本の風土で自然に生まれた日本古来の音楽をもっと利用することも考慮に入れてもよいであろう。」と書いてあります。このことから私は、今後の課題として、自閉児の為の和太鼓による足踏みを中心とした舞踊を考えてみたいと思っています。

次に、言語障害（吃り）の五歳児が、日舞を習うことにより直ったという例を紹介します。

この子供の場合、友達の弟子ですが、やはり日舞を習うことにより、踊りが好きになり自信がついたので、「これからもずっと踊らせてやりたい。」と言うのが母親の希望だそうです。日舞の動きというのは、右半身、左半身がそれぞれ違う動きをします。もちろん同じ動きをすることもたくさんあります。例えば「さくらさくら」を踊る時に、右手で桜の花びらが散っている様子をあらわし、左手は袖に入れて胸のところで抱くというように、主な動きをするほうの手と、従の動きをするほうの手がありますが、両方同じに神経をゆきとどかせなければならないというのが、日舞の特徴です。言語と脳との関係は密接であり、日舞は、右半身、左半身が別々の動きをしながら、つまり、右の脳と左の脳とを同時につかうので、今まで眠っていた神経を刺激し、脳の訓練をします。その結果、言語を矯正することができたと考えられます。言語学者のあいだでも「左利きを無理に直そうとすると吃りになる。」と言われており、「左利きを無理に直そうとせずに両方つかえるような訓練をすべきだ。」と言われていています。このことから逆説的ではありますが、言語と日舞との関係が実証されます。「日舞」はそれぞれがもっている隠された才能を発掘し個性を伸ばし、情操を豊かにすることができ、画一化した教育から

はみでた子を救ってやることもできると確信しました。洋舞が得意な子、日舞が得意な子、それぞれの個性を伸ばしてやる事ができて、いいものを見たり、東西のいい音楽を聞いたり、幅のあるよりよい学習体験ができたりすれば東洋、西洋にこだわることはないというのが、私の持論です。くどいようですが今の日本の教育制度、すなわち教育環境は西洋に偏り過ぎていると思います。

勿論、日本の礼儀作法や正座を身につけることができるようになるというのも、今さら申すまでもなく、大きくて貴重な副産物です。

次に、今回の大きなテーマである「日本舞踊は幼児の集中力を養うのにどうして適しているか。」という問題です。

日舞では、世のスピード狂には考えられないほど、ある一定時間の静止を要求することが多いです。しかし、これは休んでいるというわけではありません。静止している間に、体と精神との統一をしているのです。ほんの数秒間でも形を静止させておくということは、かなりの集中力がなければできません。例えば、下手を指す振りがあります。遊戯として扱えば、二回位指を指すことになりませんが、日舞的な表現をすると一度下手を指したまま四秒位停止しなければなりません。四秒停止するというのは集中力がなければできないことです。他のことに気をとられていると、最後のきまりなどでも数秒間静止しているのが、困難だったりします。現在のように次から次へと動きのはやいリズムやスポーツとは、違った意味での体験がそこにはあります。

次に、従来の日舞とは異なった選曲と方法について説明します。

- 一 幼稚園での童謡を中心に、つまり、子供が聞きとりやすい曲で振りをつけました。
- 二 まず着物に慣れることから始めます。
- 三 一分位の踊りから始めて、次に一分三十秒、次に二分、三分を限度とします。
- 四 一つ一つの曲に目的があるように振りつけました。

次に、その目的について説明しながらあわせて曲の紹介をします。

- (一) 第一段階の曲は「チューリップ」です。
(所要時間一分)

この曲では、①着物に慣れる事。②女振りで踊る事。③三つ首で踊る事。にポイントをおきました。まず踊りには、女振りと立役があることを認識させます。立っている時も足は内輪になっていることが、原則です。そして首は三つ振ることを約束させます。お遊戯の癖がついている為に、最初から三つ首を教えてしまわないとなかなか自分のものにならないようです。この曲では、「カイグリ」の変形も教えました。

- (二) 第二段階の曲は「さくらさくら」
(所要時間一分三十秒)

この曲から、日舞の特徴である右半身と左半身が、別々の動き方をすることもあるというテクニックを教えます。そして扇の扱い方も教え、必ず要をおさえることも約束させます。第一段階の曲では、自分が「花」になったつもりで踊りますが、第二段階の曲では、さくらが散るのを見ている「人」のつもりで振りつけました。

- (三) 第三段階の曲は「絵日傘」
(所要時間二分十秒)

この曲は、静止、集中力を養うための曲として選曲しました。傘という小道具を持って踊る楽しさ、蝶の真似をする楽しさを教えました。

- (四) 第四段階の曲は「はたる」

初めての立役なので五十秒位の曲で振りつけました。足遣いの違いを覚える為の曲です。

- (五) 第五段階の曲は「叱られて」
(所要時間二分)

おすべりを勉強する為の曲です。

- (六) 第六段階の曲は「出船の港」
(所要時間二分)

「問」にあわせて舞台を踏むということをお勉強する為の曲です。立役で踊ります。

結 論

近藤弘氏は「幼児文化論」という本の中で、「昔から子供達は、メロディックな言葉を無数に残してきた。子供達にとっての共通語は唄であった。自然を見た時に言うせりふがそのまま唄になった。子供達は、たくさんのポエム、たくさんのメロディーに囲まれてくらしていたのである。日本の伝承童謡－わらべ唄は、くらしの言葉、くらしの唄でもあった。」と書いてあります。

そしてもうひとつ忘れられていたのが、体で表現すること、それが「踊り」そのものであると私は思います。人と心の躍動は、つねに唄になって現れ、体で表現する。その表現こそが子供の生命力を現しています。これが自然体だと思います。

西洋の真似ではなく、日本の子供達の生活力からにじみでた唄による舞踊を考え、感受性が豊かで、心も体も柔軟性のあるこの時期に日本舞踊を学ばせてやりたいと思います。

日本舞踊が、日本の文化的財産としての価値を二十一世紀の子供達に託すための教育として、考え直されるべき時に、きていると思います。

現在の画一化された教育からは、得られないものがあることを訴えながら、一般教養として日舞の授業を確立させていきたいと思っています。

幼稚園児保育園児の為の一般教養として「日舞教育」の研究は始まったばかりであり、試行錯誤の段階ではありますが、これから何年かけても手がけていきたいと思っています。